

くぎり符号の使い方（５年）

●指導目標

- いろいろなくぎり符号の使い方を知り，目的や意図に応じて，効果的な表現をする。
- 『くぎり符号の使い方』（本時）

●教材について

本教材『くぎり符号の使い方』は「言葉のポケット」（補充教材・発展教材）として位置づけられている。この教材は単独で扱うよりも既習教材である『森を育てる炭作り』（５下 P 8），『みすゞさがしの旅』（５下 P 80）をはじめ，他の教科書教材，ほかの本などと関連させたほうが効果的に指導できる。つまり，文章にどのように使われているかを実際に調べる活動が理解を深める。

ちなみに，『森を育てる炭作り』と『みすゞさがしの旅』では，外国の人名のくぎりを表す「ダブルハイフン」，書名や作品名を表す「二重かぎ」，余韻の効果をねらう「ダッシュ」，「リーダー」などが本文中に多く使われている。

本教材は句読点以外のいろいろなくぎり符号の呼び方や使い方を取り上げている。たとえば，「・ 中点 なかくろ なかポツ」，「- ハイフン」，「= ダブルハイフン 二重ハイフン」，「「 」 かぎ かぎかっこ」，「『 』 二重かぎ」，「() かっこ まるがっこ パーレン」，「..... てんてん 点線 リーダー」，「—— 中線 ダッシュ」などである。それぞれの符号の呼び方や使い方をしっかり学ばせ，実際に短文を書かせたり今までに自分が書いた作文を符号を使って書き直させたりすることで正しく使えるようにしたい。

文章には句読点をはじめ，いろいろな符号が使われている。特に句読点は１年生から指導されてきており，５年生ではそれらの使い方について一層の習熟を図ることが求められている。しかし，読点は句点に比べて打ち方にはっきりした決まりがないため，子どもたちには難しく感じられている。くぎり符号の指導とあわせ，読点についても文の意味や息の切れ目など必要なところに打てるように指導したい。

ここでの学習はわずか１時間である。しかし，本教材で取り上げている符号は文章の中で重要な役割を果たすものである。くぎり符号を効果的に使えば，文章がすっきりしたり，見やすくなったり，伝えたい部分を強調したりできる。くぎり符号の呼び方や使い方の決まりを楽しみながら理解させ，読み書きの力にしっかり生かせるように指導したい。

●学習指導計画(全１時間)

展開・時		学 習 活 動	評価規準と方法
第 一 次	第１時	○本文を読み，いろいろな符号があることを知る。 ○教科書（『森を育てる炭作り』，『みすゞさがしの旅』，他のページ）やほかの本からくぎり符号がどのように使われているかを探し，ノートに書く。	関：いろいろなくぎり符号の使い方を知ろうとしている。（態度） 言：くぎり符号の使い方を知り，正しくノートに書いている。（ノート）

●本時の展開（本時 1 / 1）

目 標

- ・いろいろなくぎり符号の呼び方や使い方を知り，自分の文章表現をわかりやすくするためにそれらを効果的に使うことができる。

●展開例

学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点	評 価 ・ 支 援
1 本文（P 114～P 115）を読み，いろいろなくぎり符号があることを知る。 ・ 中点 - ハイフン = ダブルハイフン 「 」 かぎ 『 』 二重かぎ （ ） かっこ てんてん —— 中線	中点，ハイフン，ダブルハイフン，かぎ，二重かぎ，かっこ，てんてん，中線について，呼び方と使い方（用例）を一つずつ順番に短冊で掲示する。 符号も文字同様，一字扱いして原稿用紙のマスに書くのが原則であることを教えたい。	関：いろいろなくぎり符号の使い方を知ろうとしている。（態度） 支：用例はマス目模造紙に書いたものを黒板に掲示し，原稿用紙に書くときのきまりを理解させる。
2 教科書の『森を育てる炭作り』と『みずゞさがしの旅』の中で，くぎり符号が実際にどのように使われているかを確かめて，ノートに書く。 = 外国の人名の，名と姓の間などに用いる。 —— 「 」の代わりに用いる。 言葉をとちゅうで止めたり省略したりするときに用いる。	「トホ＝イリル村」（5下 P 11 L 16），「——金子みずゞという人は，いったいどんな人なのだろう。」（5下 P 8 2 上段 L 10），「手帳は五十年以上たっているので，だいたいたんていですが.....」（5下 P 8 8 上段 L 14）などがあることをおさえる。 中線（——）やてんてん（.....）は二字扱いして二マスに書く。	言：くぎり符号の使い方を知り，正しくノートに視写している。（ノート） 支：方眼罫のノート（あるいは原稿用紙）などを活用して，くぎり符号の書き方の原則をしっかりと教える。
3 教科書の他のページや，ほかの本から同じように用例を探してノートに書く。	用例を抜き書きさせる。 例外的な使い方が見つかる場合もあるので，許容範囲が広いことをおさえる。	関：くぎり符号の使い方をさらに知ろうと調べようとしている。（態度）

4 教科書に示された八つの区切り符号の中から六つを選び，それらを使って短文を書く。 5 この時間に学習したくぎり符号を板書（短冊）をもとに確かめる。	調べた用例を参考にして書き換えさせてもよいし，身近なできごとをもとに自分なりに書かせてもよい。 原稿用紙かワークシートに書かせたい。 くぎり符号の呼び方や使い方について板書（短冊）を基に声を出して再確認させる。	支：かぎ，二重かぎ，かっこ，中点などの用例に特に目を向けさせる。 言：くぎり符号の使い方を知り，目的や意図に応じて正しく使っている。 （観察・原稿用紙，ワークシート） 支：文の最初は一マス空ける（一字下げる）ことや読点の打ち方も意識させる。 読：くぎり符号の呼び方や使い方を確かめて大きな声で音読している。（観察） 支：一つずつ順番に指さしをして確かめながら音読させる。
--	--	---

● いろいろな符号の使い方の指導で留意したいこと

国語科をはじめ他教科でも意図的にくぎり符号を使って書く機会を多く設ける。

- ・くぎり符号を使って書いたところを具体的に認め，ほめる（マーカーで印をつけたりコメントを書きこんだりするのよい）。

文章を読むときに，くぎり符号の役割や効果についても考えさせる。

- ・書き手の立場に立たせて，くぎり符号を使った目的や意図を想定させる。

わかりやすくする目的で今までに書いた作文（短作文）をくぎり符号を使って書き直させる。

- ・読み書きの指導では句読点の打ち方やくぎり符号の使い方を常に意識させ，継続的に指導することを大切にする。

- ・適切な使い方をしている用例を他の子どもたちにはもちろん、家庭にもタイムリーに(学級通信，一枚文集，教室掲示などで)紹介する。

読点やくぎり符号は、はっきりした打ち方や使い方が確立されているわけではないので、自分なりに打ち方や使い方のルール(基準)を決めて使いたい。

- ・教師が書く板書や掲示物，学級通信などでも読点の打ち方やくぎり符号の使い方にルールを決めて適切に使うようにしたい。

くぎり符号の使い方の原則を理解させる。

- ・くぎり符号は文章をわかりやすくするためのものである。使うべきところに適切に使う。使いすぎは逆効果である。
- ・原稿用紙に書くときは、くぎり符号も一字扱いで一マスに書くのが原則である。ただし、行の頭にかぎやかっこなどの受けや句読点が来ないように留意する(前の行の最後のマスにほかの字といっしょに書く)。
- ・一般の文章では会話や思ったことを書く「」の中や、注をつける()の中では文の終わりの句点は省略されるが、学校の教科書や児童向けの図書では省略されていない。